

イザーをした。

調査項目は自覚的所見として、鼻閉、鼻漏、後鼻漏、頭重感の4項目を、他覚的所見として、粘膜腫脹、鼻漏、後鼻漏、粘膜発赤、X線所見の5項目について検討した。さらに総合判定として4週後に評価をした。

自覚的所見の改善度に関しては、3群間に有意差を認めない。他覚的所見では、X線所見および粘膜腫脹において、試験薬剤が対照より有意に優れた結果を得た。全般改善度では、Thiamphenicol 混合液、Lysozyme 単独、対照の順の成績が得られ、統計学的にも有意差が認められた。

副作用の発現をみたものはなく、ネブライザー療法中に不快感などを訴えた症例も認めなかった。

治療終了後、難治性の症例に対しては、Cepharanthin 液を混合した溶液を用いて良好な結果を得ている。

しかし、慢性副鼻腔炎に対するネブライザー療法に際しては、今後、薬剤の選択、そして、それらの適当な組み合わせを考え、病態に最もかなった合理的な治療が行えるよう努力しなければならないと考える。

質 疑 応 答

小宮山 (九州大) ① プラセボには何を用了か。
② Lysozyme と Thiamphenicol との併用効果は、いかなる機序によるかと考えるか。

古田 (鹿児島大) Placebo は生食水を使用した。Lysozyme と Thiamphenicol との併用を行ったのは、Lysozyme 存在の下では抗生剤の吸収が促進するという効果を考えた。また、Lysozyme 単独においても、Lysozyme が細胞膜の N-acetyl-gluco-samin と N-acetyl-muramin 酸の間を加水分解することによる溶菌作用を有するために本剤をネブライザー液として選択した。

耳鼻咽喉科感染症に対する Midecamycin 誘導体 MOM 錠の使用小験

森 川 謙 三 ・ 古 田 茂 ・ 大 山 勝*

耳鼻咽喉科領域で扱う急性感染症はその大半がグラム陽性球菌単独、あるいはそれを主体とする混合感染である。なかでもブドウ球菌の関与する比重がきわめて大きいとされている。したがって、本領域の急性感染症にはグラム陽性菌に対して強力かつ抗菌スペクトルの広い抗生物質が第一選択剤として使用されてきた。とりわけ、マクロライド系薬剤はペニシリン系薬剤やテトラサイクリン系薬剤に比して重篤な副作用が少ないことから、過去耳鼻咽喉科領域の急性感染症に対して広く頻用されてきた。しかし、近年マクロライドの肝障害が問題視され、また、多剤耐性ブドウ球菌や嫌気性菌などに対する対応とともに、改めてその検討が求められていた。

今回、われわれは耳鼻咽喉科領域における代表的感染症 20 症例に対して、Midecamycin の誘導体である新抗生物質 MOM 錠を経口投与し、その臨床効果を検討した結果、つぎのような成績がえられた。

1) 臨床成績では著効 4 例、有効 10 例、やや有効

5 例、無効 1 例であり、著効・有効を合算した有効率は 20 例中 14 例 70%であった。

2) グラム陽性菌感染では 71.5% の有効率がえられ、一方、グラム陽性桿菌が検出された症例においても 50% に効果が認められた。

3) 本剤の経口投与中に副作用と考えられる症状の発現はまったく認められなかった。

以上の成績を総合するとき、MOM 錠は耳鼻咽喉科領域の感染症に対しては、臨床的に有用性の高い抗生物質として推奨しうるものと思われる。

質 疑 応 答

柳内 (旭川日赤) 急性中耳炎症例において、年令、鼓膜切開、他剤併用について御教授下さい。

森川 (鹿児島大) 年令は全例成人で、他の薬剤併用療法は当然行わず、鼓膜切開の加療のみを行いました。

* 鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室